

第 137 話<休廃止鉱山調査>の要約と参考資料

第 137 話<休廃止鉱山調査>の要約

高城町の四家鉱山跡でヒ素を含む鉱さいが流出。それを県が隠していたことが 1969 年 10 月に新聞によって暴かれました。四家から約 160 キロ北の土呂久鉱山跡でも調査が行われ、住民がヒ素を含む用水の水を飲み水や生活用水として使っていたことが明るみに出ました。

第 137 話<休廃止鉱山調査>の参考資料

1 3 7 - 1 四家鉱山跡からヒ素含む鉱滓流出

1969 年 10 月 23 日朝日新聞第二社会面「ヒ素を含んでいた / 廃鉱からの流出カス / 検出知らされず / 住民無視と怒りの声」

【都城】宮崎県北諸県郡高城町四家（しか）の穴水川の堤防が 7 月の集中豪雨で決壊、アンチモンの精錬カスが流れ込んで 8 月に川の水からヒ素が検出されたが、堤防の補修が遅れ、雨のたびにヒ素を含んだ土砂が川に流れ込んでいる。「県は人体に影響がないというだけで、分析結果も知らせてくれず、決壊箇所は 4 カ月近くも放ったらかし。住民を無視した行政だ」と町民から怒りの声があがっている。

四家には戦前からアンチモンの鉱山があったが、35 年に経営不振で閉山した。この間、精錬したカスが約 1 万立方メートルもたまり、これが決壊箇所から穴水川に流れ込んで鉛色に濁った。このため宮崎県工鉱課は現地を調べ、8 月に県工業試験場で川の水を分析した結果、決壊箇所近くでヒ素 1.31ppm、硫酸銀 9.1ppm を検出した。ところが高城町役場の話では「県から濁りは人体に影響がないと口頭で知らせて来ただけ」という。

アンチモンの精錬カスはヒ素を含んでいる。県工鉱課と県衛生研究所は、検出したヒ素は、飲料水の許容量 0.05ppm を越えているが、6 キロ下流の大淀川に流れ込むころは薄まり、大淀川を水源にしている宮崎市の上水道への影響はないと思われるという。穴水川の流域には 4 地区で計 130 戸の農家があり、川で野菜を洗ったり、牛に水を飲ませていたが、濁りがひどくなってからは中止している。

問題の堤防や廃鉱一帯を管理している都城営林署は「閉山後も経営者が鉱業権を持っていた。町や県が復旧を頼んだが経営不振で無理だった。9 月に鉱業権を放棄したので国が補修することになり、31 日に工事の入札をする。完工は今年末の予定」といつている。

中村和夫宮崎工鉱課長補佐の話 精錬カスの流入を防ぐことを第一に考えてきた。井戸は川より約 50 メートル高い所にあるので、心配はないと思う。堤防の復旧後さらに水質検査をする。

淵之上兼助高城町長の話 検査内容について県から「人体に影響はない」と口頭で連絡があっただけで、ヒ素が含まれていたとは知らせて来ていない。けしからん。文書で結果

を知らせるよう 23 日に県に申し入れ、そのあとで町民に知らせ注意を呼びかける。

1 3 7 - 2 穴水川ヒ素汚染のその後

1969 年 10 月 24 日朝日新聞第二社会面「穴水川のヒ素 / 分析結果ひた隠し / 宮崎県も高城町も / 重なる住民無視」

【都城】宮崎県北諸県郡高城町四家の穴水川から、飲料水の許容量の 26 倍ものヒ素が検出されながら、住民に知らされなかったことについて 23 日、県当局が事情を調べたところ、県の係員が 8 月に「公表しないように」といって分析結果を町職員に渡し、町職員は町民の反響を恐れて公表しなかったことがわかった。このほか関係行政機関も「権限内での手は打った」といい、重なる住民無視のやり方に、町民の怒りは高まっている。

県や町関係者の話では、7 月初めの集中豪雨で堤防が切れ、アンチモンの精錬カスが穴水川に流れ込んだため、町役場は 7 月 17 日、県に知らせた。県工鉦課は 19 日に現地を調べ、川の水を持帰って県工業試験場で分析した。

8 月 5 日、現地で宮崎県、高城町、福岡鉦山保安監督局、廃鉦一帯の国有地を管理している都城営林署の係員が調査をした。このとき、分析結果の写しが県から出席者に配られていた。高城町経済課の田口利男庶務係長は「県工鉦課の代表が、公表しないようにと渡してくれた。この写しは丸尾重雄町経済課長に渡し、県の意向を伝えた」という。受取った丸尾課長は「堤防の復旧を早くするため、町民を刺激しないようにと考えて、県の指示に従った」といい、上部にも報告していなかった。

一方、この調査に出席した県工鉦課の中村和夫課長補佐は「下流ではヒ素の濃度もかなり薄くなり、人体には影響ないようなので、公表は見合わせた方がよいのではないかと相談的に話した」という。このように一部職員の考えから「ヒ素検出」の事実が町民の目から隠された。

また、問題のヒ素は福岡鉦山保安監督局の分析でも見つかった。同局は 7 月に現地調査をして川の水を持帰り、分析した結果、宮崎県の分析とほとんど同じ量のヒ素を検出した。しかし宮崎県から「付近の家は川水を飲料水に使っておらず、ヒ素は流れで薄められ、人体に影響はないと思う」と連絡を受けたので大きな問題になるとは思わなかった。そして鉦山の元経営者に復旧工事を指示したが資力がなく、9 月になって鉦業権を放棄したので復旧工事は同局の手を離れ、土地管理者の都城営林署に移されたという。

同署は 31 日に復旧工事の入札をすることになっている。

1969 年 10 月 29 日朝日新聞宮崎版「定期的に川水を検査 / 穴水川のヒ素問題 / 県、議会で答弁」

1969 年 12 月 28 日朝日新聞宮崎版「飲料水の許容量下回る / 穴水川のヒ素」

1970年2月13日朝日新聞宮崎版「三鉱山でヒ素を検出 / 公害総点検 / 見立では高い数値出る」

福岡鉱山保安局と県は去年11月から県内の各鉱山の公害総点検をしているが、県は12日、これまでの調べで西臼杵郡日之影町の見立、同郡高千穂町の土呂久、東臼杵郡東郷町男錫の三鉱山の排水口などでヒ素を検出したと発表した。しかし、同監督局は、川の下流ではヒ素量もぐんと下回っているの、いまのところ飲料水に問題はない、との見解をとっている。

この総点検は昨年9月、北諸県郡高城町四家の穴水川に大量のヒ素が流出した問題が表面化したのがきっかけ。調査は11月、15カ所の鉱山で坑内水や川水を合わせて70地点で採水し、九州工業技術試験所（鳥栖市）と県工業試験場でヒ素やカドミウム、亜鉛などの分析をしており、このほど県工試で分析したヒ素の分だけがわかった。

それによると見立鉱山の排水口6カ所で平均値0.06ppm、土呂久の排水口で0.108ppmのヒ素を検出した。国が排水量などから示している見立、土呂久鉱山のヒ素排出の指導基準は平均0.05ppmで、いずれも基準を下回っていたが、見立では2カ所で0.584—2.58ppmの高い数値が出たため、同監督局は排水処理施設を改善するよう勧告した。

また、土呂久の排水口から約300メートル下流の土呂久川のかんがい用水取水口では0.107ppmと飲料水基準の2倍のヒ素が出た。（略）

県工鉱課は「ヒ素についてはあまり問題がないことがわかったが、まだ総合的な分析結果が出たわけではないので、各鉱山の公害施設が万全だということはいえない。県としてもカドミウム、亜鉛などの各分析結果を待って、総合的な検討をする」と話している。

1970年2月20日朝日新聞宮崎版「三段構えの堤防完成 / 旧四家鉱山精錬カスすて場 / 復旧工事終る」

1970年10月3日朝日新聞宮崎版「飲んでいたヒ素入り水 / 高千穂町土呂久南 / 住民無視と怒る地元 / 廃鉱の排水 / 県発表は「問題ない」

県と福岡鉱山保安局は昨年11月、西臼杵郡高千穂町岩戸、旧土呂久鉱山の排水について水質調査し、許容量を越えるヒ素を検出したが、「飲料水としては使われておらず問題はない」という趣旨の報告を発表した。ところが、同町土呂久南地区では現にわき水のない数戸の家が以前からこの水を飲料水として使っているほか、ほとんどの家でも食器洗い、ふろ水、水田には利用しているなど、調査とは違った事実があり「住民無視のいいかげんな調査じゃなかったのか」という声があがっている。

同地区ではいま自衛手段として新しい水道施設をつくる計画を進める一方、鉱山あとの管理を強化するよう訴えている。

水質検査で検出されたヒ素の量は旧土呂久鉱山大切坑入口で0.108ppm、下流の東岸寺

用水取入口で 0.107ppm といずれも天気のよい日の調査で飲料水基準の 0.05ppm をはるかに上回る値が出ている。とくに東岸寺用水は約 80 年前から土呂久南、立宿地区の合わせて 40 世帯、207 人が利用しており、昭和の初めに鉦山ができてからも飲料水、水田用として大切にされてきた。最近になってほとんどの家が飲料水にはわき水を利用するようになったが、渇水期には用水を飲む家もあるほか、わき水をひけずにまだ用水だけに頼っている家もある実情だ。

旧土呂久鉦山について県は今年の 6 月「大雨の際、鉦さいが川に流れ込むおそれがある」として福岡鉦山保安監督局に管理の徹底を要請している。だがその後の措置はとられておらず、県も確認していない。実質的には以前通り放置されたまま。大雨の日には川が白くにごることもあり、それはヒ素が流れ込むためではないかと地区民の不安は大きい。農業を営んでいる佐藤全作さん（45）は「農作物にも大きな被害のあった昔に比べたら、今は問題にならないほどきれいになった。それでも許容量以上のヒ素が含まれているとは……」と、やりきれない表情を見せる。土呂久南地区には現在 93 人が住んでいるが 70 歳以上の老人はわずかひとりだけ。「早死にはヒ素のせいかも知れない」と人々は不安がっており、「問題はない」と発表したお役所仕事に怒りをぶちまけている。

1971 年 3 月 14 日朝日新聞宮崎版「上流に大腸菌やヒ素 / 五ヶ瀬川一帯の水質検査 / 基準を越す汚染」

1971 年 3 月 19 日朝日新聞宮崎版「ヒ素を再調査 / 見立・岩戸川」

1971 年 4 月 7 日朝日新聞宮崎版「ヒ素分析値に違い / 県の調査は基準以下 / 日ノ影と岩戸川」

1971 年 5 月 13 日朝日新聞宮崎版「地区民共同で水道設置 / ヒ素の心配なくなる / 高千穂町岩戸」

水質基準を上回るヒ素が検出されて問題になっている西臼杵郡高千穂町岩戸の土呂久南地区では、これまでわき水のない数戸の農家がヒ素入りの用水を飲料水として使っていたが、このほど共同で水道パイプをつくり、やっとヒ素混じりの水から解放された。

一昨年と今年 3 月、県は旧土呂久鉦山の排水について水質調査をしたが、東岸寺用水取入れ口でそれぞれ 0.107ppm、0.07ppm と二度とも水質環境基準 (0.05ppm) を上回る多量の砒素を検出した。しかし県の発表ではいずれも「東岸寺用水は水田に使用されて影響が心配されるが、一般家庭では使用されていない」となっていた。

同用水は約 80 年前から土呂久南、立宿（たちやどり）地区の合わせて 40 世帯約 200 人が利用、最近は主に農業用水として使われているが、わき水のない数戸の農家ではあいかかわらず飲料水として使ってきた。

今度できた水道パイプは約 3 キロの長さ。9 戸が約 8 万円ずつ出しあい共同作業でつくった。住民の一人は「町役場から飲むなといわれていたが、他に飲む水がなかった。ヒ素についてはだれに苦情をいってよいのかわからず、結局自分たちでわき水を引くしかなかった。それにしても飲んでいるのに飲んでいないという県もおかしい」と首をかしげる。

また岩戸川のヒ素問題は同郡日之影町の日ノ影川とともに今年の春、延岡市と県との水質検査の単位が一けたも違う結果となり、とまどった地元が双方に対して合同調査を望んでいる。

1971 年 7 月 13 日朝日新聞宮崎版「五ヶ瀬川流域のカドミウム対策 / きょうから鉦山調査 / 土呂久、見立両鉦中心に」

1971 年 7 月 14 日朝日新聞宮崎版「排水や土壌を採取 / カドミウム対策 / 共同調査が始まる」

1971 年 8 月 13 日朝日新聞宮崎版「野ざらしのスズ選鉦かす / 雨のたびに流出 / 高千穂町岩戸東岸寺」

1971 年 8 月 26 日朝日新聞宮崎版「流れ出るスズの選鉦かす / 早急に防護施設 / 高千穂町の現場を調査」

1971 年 11 月 14 日朝日新聞宮崎版「いまも尾をひく鉦害 / 岩戸小斎藤教諭教研集会で発表 / めだつ呼吸器の病気 / 県、住民の健康診断を検討」

137-3 井口勝夫記者と土呂久取材

井口勝夫さんの SNS (2022 年 2 月 13 日)

土呂久でかつてヒ素を焼いていて、当時も住民が旧鉦山から出る水を飲んだり、田んぼに引いていることを知り、その水のヒ素含有量が基準を超え、住民の平均寿命も短いことを数回記事にしたことがあります。斎藤先生も関心をもっていて、何回か話をした記憶もあります。高千穂にいた期間は、これもはっきりしませんが、1971 年の秋ごろまでのはず。延岡支局に異動になって間もなく、「西日本新聞に明日載る」と斎藤先生が教えに来たのを覚えています。

確か 71 年の秋ごろ、宮崎支局での会議の前に編集局長と編集業務部長、田中支局長が高千穂に立ち寄り、一緒にかつぽ酒を飲みました。その時、編集局長から「ここは暇だろう、記事はどのくらいのペースで出しているの？」と聞かれたから、「三日に一度ぐら

い」と答えたら、無駄だと思ったのか、その一週間後くらいに突然、延岡への異動が決まったような。正式な異動じゃなかったかも。そのときはまだ土呂久は表面化していなかった。